

ジョゼ・
サラマーゴ

岡村多希子[訳]

死の年 レカ イル スド

José Saramago
O Ano da Morte de Ricardo Reis





ジョゼ・
サラマーゴ

岡村多希子〔訳〕

▲カモンイス広場と記念碑

José Saramago
O Ano da Morte de Ricardo Reis

リカルド
死の年

著者略歴

ジョゼ・サラマーゴ (José Saramago)

1922年生まれのプロポルトガル人作家。独学で知識や教養を身につけ、ジャーナリストになる。53歳のときに職業作家を目指し、1980年前後から2年に一作の割合で長編小説、戯曲を書きはじめ、1998年、プロポルトガル語圏で初のノーベル文学賞を受賞する。邦訳作品には本書をはじめ、『あらゆる名前』(彩流社)、『修道院回想録』(而立書房)、『白の闇』(NHK出版)、『見知らぬ島への扉』(アーティストハウス)がある。

訳者略歴

岡村多希子 (おかむら たきこ)

東京外国語大学名誉教授

主訳著書 『方舟』(彩流社)、『プロポルトガル短篇選集』(彩流社)、『東洋遍歴記・全3巻』(平凡社)、『十六・七世紀イエズス会日本報告集』(共訳、同朋舎)、『おヨネとコハル』(彩流社)、『モラエスの絵葉書書簡』(彩流社)、『日本精神』(彩流社)、『プロポルトガルの友へ』(彩流社)、『徳島の盆踊り』(講談社)、『モラエスの旅』(彩流社、著)

リカルド・レイスの死の年 —— プロポルトガル文学叢書 ⑫

2002年9月15日 発行

定価はカバーに表示してあります。

著 者 ジョゼ・サラマーゴ

訳 者 岡村多希子

発行者 竹内淳夫

発行所 株式会社 彩流社

〒102-0071 東京都千代田区富士見2-2-2

電話 03 (3234) 5931 FAX 03 (3234) 5932

<http://www.sairyuusha.co.jp>

e-mail: sairyuusha@mtg.biglobe.ne.jp

印刷 (株) 平河工業社

製本 (株) 難波製本

Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

ISBN4-88202-770-4 C0097

目次

リカルド・レイスの死の年 5

ジョゼ・サラマーゴとフェルナンド・ペソア——解説に代えて 453

訳者あとがき 466

リスボン関係地図 468

O Ano da Morte de Ricardo Reis by José Saramago

Copyright © 1984 José Saramago & Editorial Camminho, SA, Lisboa

Japanese translation rights arranged with Dr. Ray-Güde Mertin

Literarische Agentur through Japan UNI Agency, Inc., Tokyo.

賢者とは、世界のできごとに満足する者である。

リカルド・レイス

行動しないやり方を選ぶことが、僕が人生でつねに心がけ配慮したことであつた。

ベルナルド・ソアレス

存在したこともない人についてこんなふう語るのはばかげていると言われたら、僕は答える、リスボンや、書いているこの僕や、その他どんなものも、どこかしらにかつて存在していたことを証明できるわけではない、と。

フェルナンド・ベソア

装幀／渡辺将史

第1章

ここで海が終わり、陸ははじまる。雨が青白い町の上に降り、川の水は泥でにぎり、低地は水浸し。黒っぽい船が一隻、陰気な流れをのぼってゆく、アルカンタラ波止場に停泊しようとしているハイランド・ブリゲイド号だ。イギリスの王立郵船に所属するロンドン・ブエノスアイレス間の大西洋横断用の船で、海の道をまるで杼のようにあっちへ行ったりこっちに来たり、いつも同じ港、ラ・プラタ、モンテヴィデオ、サントス、リオデジャネイロ、ペルナンブコ、ラス・パルマスに行き帰りとも寄港する、そして、航海中に難破しなければ、さらにヴィゴとブローローニユ・シユル・メルに立ち寄り、今テジョ川に入ろうとしているように、最後にテムズ川に入る、どちらの川、どちらの町が大きいのだろうか。大船ではない、排水トン数一万四千トンながら、よく海に耐えることは、今回の大洋横断でも立証されたとおり、絶えざる悪天候にもかかわらず、船酔いしたのは大洋の旅の初心者か、旅慣れていれば胃弱者のみ、そして、船内の設備がきわめて快適で心地よいところから、姉妹船であるハイランド・モナーク号同様、家庭的な船という親しみのある名が愛しくも与えられている。両船ともスポーツや日光浴のための広い後甲板をそなえ、たとえば、クリケットも可能であり、これは野外競技ではあるが、海の波の上でもプレーすることができ、英帝国には不可能なことは何ひとつないことを証明している、それが帝国統治者の意志であらんことを。天気の良い日には、ハイランド・ブリゲイドは子どもの遊園地であり老人の楽園だが、今日はちがう、雨が降っているし、船上での最後の午

後である。塩で曇ったガラスの後ろで男の子たちが、灰色の町を、丘の上に広がる、まるで平屋だけからできているかのような飾り気のない町をのぞき見る、はるか彼方に見えるのは、高いドーム、頑丈な切り立った壁、城塞の廃虚らしいもの、すべてが幻想、妄想、閉ざされた空から下りる動く水のカーテンによってつくりだされた蜃気楼でないとしたら。好奇心という美德を生まれつき多く与えられている外国人の子どもたちは、その場所の名前を知りたがる、両親が彼らに教えてやる、乳母が、ナースが、ボンヌが、フロイラインが、用事で通りかかる水夫が発音してみせる、リジュボア、リスボン、リスボンヌ、リサボン、中間的な呼び方と正確な呼び方をのぞけば四種類の呼び方、このようにして子どもたちはそれまで知らなかったことを知る、そしてそれは今や彼らの知識となった、つまらないもの、単なる名前にすぎないが、Lisboaとはスペイン語でもポルトガル語でも正しい書き方であるとしても、発音には普通の耳にはとらえがたい相違があつて、アルゼンチン人であればアルゼンチン特有のアクセント、あるいはウルグアイ人の、ブラジル人の、スペイン人の特有のアクセントではほぼ同じように発音され、若い知性をさらに混乱させる。ここにはじめて立ち寄った旅人たち、自分流に別の名前に変えながらリスボン、リスボンとくりかえしているこの子どもたちや、ハイランド・ブリゲイドが二度も幽霊船になつて海底から水をしたたらせて現れ出たかのように、船材や鉄にしみ通るひどい湿気に眉をひそめ身をふるわせる大人たちの、すでに薄れてゆく記憶を、まだ陸を前にしながら、この悪天候の灰色の霧が完全に曇らせてしまわないように、明日の早朝にハイランド・ブリゲイドが港口を出るときには、せめて太陽が少しは顔をのぞかせ空が晴れてほしいものだ。好んで、自ら選んで、この港に留まろうとするものはひとりもないだろう。

下船する人はほとんどいない。船は接岸し、舷門の道板はすでに下ろされ、下にはポーターと船荷積下ろし人が姿を現しはじめる、当直の税関警察官が差し掛けや哨舎から出てくる、税関職員が現れ

る。雨は小やみになり、ほとんど降っていないと言つてよい。階段の上部に乗客が集まるが、検疫があるのかどうか、まるで下船がゆるされたことを疑っているかのように、すべりやすい段々をこわがつているかのように、ためらっている、だが、彼らを怯えさせているのは静寂な町なのだ、ひよつとしたら町の人たちは皆死んでしまい、雨が降っているのはまだ残っているものを溶かして泥濘にするためなのではあるまいか。のぞき窓の後ろには、波止場に沿つて停泊中の別の船がにぶく光り、起重機が小枝を切り払つた木の枝のように黒々としている、ウインチは静止したまま。日曜日である。波止場のバラックの向こうに、建物の正面や城壁にかこまれた、さしあたっては雨からは守られているものさびしい町がはじまる、人々は縁取りのある悲しげなカーテンを引き、うつろな目で外を眺める、屋根の雨水が樋を下る音が聞こえる、雨水は溝の玄武岩へ、歩道の光る石灰石へ、あふれ返る排水溝へ流れ落ち、洪水があつたところでは、溝の蓋がもち上がっている。

最初の乗客が降りる。単調な雨の下で肩をすくめながら袋や旅行鞆をひきずつて、海と空のあいだを揺れ動くイメージの夢のなかを旅したかのような途方にくれた様子をしている、船首はメトロノームのように上下し、波は立ち騒ぎ、水平線はねむりを誘う。誰かが胸に子どもを抱いている、静かにしているところからポルトガル人の子にちがいない、ここがどこなのかを訊ねようともしない、あるいは事前に聞かされているのかもしれない、せまいベッドで早く眠らせるために美しい町と幸福な暮らしを約束したのだろう、またもおとぎ話、この人たちには移民の苦勞は耐え難かつたのだ。また、年輩の女が、傘を広げようとして、脇の下にもついていたトランクの形をした緑色のブリキの小箱を落とす、波止場の敷石にぶつかつて箱はつぶれ、蓋がとび、底が抜ける、金目のものは何ひとつない、大切なものだけだ、色あざやかな襦袢切れ、手紙、写真は飛んでいってしまった、ガラスの数珠は割れ、白い糸玉は今やよごれ、そのうちのひとつは波止場と船端のあいだに消える、三等の乗客だ。

陸に着くや、彼らは建物のなかにかくこむ、外国人は嵐に悪態をつく、まるでこの悪天候は我々ポルトガル人のせいであるともいうかのように、フランスやイギリスなど自分たちの国ではもっと天気が悪いことを忘れてしまったらしい、要するに、この連中にとつてはどんなものでも、自然の雨すらも貧しい国を軽蔑する口実になるのだ、愚痴を言う理由は我々の方にこそあるのだが、ここでは黙っている、この冬はひどい冬だ、肥沃な田畑からあらゆる作物が引っこ抜かれた、小っぱけな国だ、作物をこんなに必要としているのに。荷下ろしがすではじまっている、光沢のある合羽に身をつつんだ水夫たちはフードをかぶった呪術師のようだ、下ではポルトガル人ポーターたちが身軽に動いている、底つきの帽子と耐水性の裏打ちされた短いチョッキ、ずぶぬれになつても一向に平気な様に見える人たちは皆あきれ返る、恐らく快適さをかえりみないこの態度に旅人たちの財布、現代風に言うところの札入れは憐憫の情を抱き、憐憫の情によつてチップが増す、おくれた民だ、各人が余分にもっているものを、あきらめ、卑屈、忍耐を、手をさし出して売る、そのような商品をこの世で買ひとる者を見出し続けられればよいのだが。乗客たちは税関へ行く、予想どおり大した人数ではないとはいへ、税関を出るには時間がかかるだろう、記載すべき書類は多く、勤務についている税官吏の筆跡は馬鹿丁寧だからだ、恐らく手ばやい職員は日曜日は休んでいるのだ。夕暮れが迫っているが、まだ四時だ、もう少し陰れば夜になる、だが、建物の中はつねに夜みたいなので、弱々しい電灯が一日じゅうともり、切れている電球もある、あれはもう一週間も切れたままで、まだとりかえてない。よごれた窓越しに水明かりが届く。重たげな大気は濡れた衣服、酸っぱい荷物、制服の粗布のにおいがする、そして憂愁が広がり、旅人たちを押し黙らせる、この帰国には一片の喜びもない。税関は控えの間、通りすがりのリンボだ、外はどうなっているのだろう。

やせた白髪まじりの男が最後の書類にサインをし、コピーを受け取る、出て行つて陸での暮らしを

ふたたびはじめてよいのだ。ポーターがひとり彼のあとをついて来る、ポーターの風采をこまごまと説明するべきではない、さもないと、この観察を無限に続けなければならぬから、旅人とポーターを見分けなければならぬ人の頭を混乱させないようにするために、必要ならば、ただ言うことにしよう、ポーターは旅人同様、やせた白髪まじりの、小麦色の肌をした髭のない男であるが、はつきりとちがうのは一方は乗客、もう一方はポーターだということだ。ポーターは大きなトランクを金属の手押し車にのせ、比較的小さな別のふたつのトランクを、軛くみが修道服のカラーのように首の後ろにまわしてかけた革紐で首からぶら下げる。外に出ると、広い庇の下の地面に荷物を置いてタクシーを探しに行く、ふだんはその必要はない、たいていは船の到着を待つてそこに来ているからだ。旅人はたれこめた雲を、それから、でこぼこの地面にできた水たまりを、油や食べもの滓ずやさまざまな芥あじでよごれたドックの海水を眺める、ひっそりと停泊している軍船に彼が気づいたのはその時である、ここにそんな船がいようとは思ひも寄らなかつた、それらの船にふさわしい場所は公海であり、戦時や演習の時でない限り、河口に、かつての謂いいによれば、そして現在なお多分言われているように、世界中の全艦隊が投錨してもどんな艦隊かを見られる恐れがないほどに十分に広い河口に、いるはずだからだ。他の乗客がそれぞれポーターを従えて税関から出てくる、その時、タイヤの下で水をはねとばしながらタクシーが一台現れる。待っている人々は慌てて手を振る、だが、件のポーターが踏み台に跳びのり、大きな身ぶりをする、このタクシーはあの旦那のだ、こうして、雨と状況が手伝え、リスボン港のどんなに身分の低い用務員さえもつましい手に幸福をとらえ、一瞬にしてそれを与えたり引っこめたりすることのできるものが明らかとなる、神が生を与えたり引っこめたりすると信じ

*1 キリスト教に接する機会のなかつた人や洗礼をうけていない小児、異教徒などの靈魂の住むとされる、地獄と天国とのあいだにある場所。

られているように。自動車の後部に固定されている荷台を運転手が下ろしているあいだに、はじめて軽いブラジル訛を感じさせて旅人が訊ねる、あの船がドックにいるのはなぜなのかね、ポーターが答える、運転手を手伝って大きなトランクをもち上げていたので喘ぎながら、ああ、あれは海軍のドックなんで、天候が悪いんで、一昨日ここに曳航してきたんですよ、そうでもしなけりゃ、アルジェスまで流されて座礁しちまうでしょうよ。他のタクシーが到着する、おかれていたのか、船が予定の時刻より前に着いたのか、今や広場はタクシーの選り取り見取り、必要を満たすのは簡単になった。いくらだね、旅人が訊ねる、定額以上であれば、お好きだけ、ポーターが答える、だが、定額がいくらとも、ほんとうはいくらほしいとも言わない、ポーターとはいえ大胆な者を守る幸運を信じているのだ。イギリスの金しかないんだが、ああ、それで結構です、そして差し出した右手に十シリングが置かれるのを見る、コインは太陽よりも明るく輝いている、ついに星辰の王はリスボンの上にのしかかる雲を征服し得たのだ。重い荷を運んだり深い感動を味わうが故に、ポーターとして長くたく生きる第一の条件は青銅のように頑丈な心臓をもつことだ、さもないと、心臓の持ち主は雷にうたれて完全に参ってしまう。彼は過剰な報酬にお礼をしたい、せめて言葉の上だけでも借りをつくりたくないと思う、そこで、求められもしない情報をつけ加える、聞こえない感謝の言葉につけ足す、駆逐艦です、旦那、僕らの、ポルトガルの、テジヨ号、ダン号、リマ号、ヴォウガ号、タメガ号です、ダン号はあのいちばん手前です。それらは寸分のちがひもない、名前をとりかえることもできる、いずれも同じ、そっくりで、死のような灰色に塗られ、雨に浸っている、甲板には人つ子ひとりいない、旗は檻樓のように濡れそぼっている、別に不敬なことを言おうというのではない、だが、ともかくも、ダン号はこの船だということを我々は知った、ダン号の消息を我々のはちに再び知ることになるだろう。

ポーターは帽子を上げて礼を言う、タクシーは動き出す、運転手は訊く、どちらへ、そして、いかにも単純な、いかにも自然な、状況と場所にかにもふさわしいこの質問に旅人は不意打ちを喰らう、まるでリオデジャネイロで乗船切符を買ったことが、あらゆる質問に対する、そのときには沈黙しか見出すことのできなかったあの過去の質問に対する答えであつたし、また答えであり続け得るとでもいうかのように。そして今、下船するや否や、沈黙しているわけにはゆかないことをただちに知る、多分、二つの運命的な質問のひとつ、どちらへ、と訊かれたからだ、もうひとつのもっと困った質問は、何のために、というものののだが。運転手はバックミラーをのぞき、乗客に聞こえなかったのだと思い、どちらへ、とくり返すためにすぐに口を開こうとする、だが、それより先に、まだあいまいなためらいがちな答えが来る、ホテルへ、どちらのホテルですか、さあ、そして、さあ、と言つてから、旅人は自分の求めているものを知る、船に乗っていたあいだずっと選択を考えていたかのようにきっぱりと言う、下の方の、川の近くにあるホテルがいい、川の近くには一軒だけ、アレクリン通りのとば口のブラガンサ・ホテルでしたら、ご存知かも知れませんが、そのホテルのことは記憶にない、でも、通りはどこにあるか知っている、ばくはリスボンに住んでいたんだ、ポルトガル人だ、ああ、そうですか、訛からブラジル人だ思ったのですがねえ、訛がそんなにはつきりわかるかね、まあ、ちよつとですけれど、十六年もポルトガルを留守にしていたからね、十六年は大した時間ですよ、こちらにはひどく変わったとお思ひになるでしょう、こう言うと、運転手はいきなり押し黙る。

旅人には変化はそれほどは思われない。通っている大通りは、大体において、昔の記憶に一致する、ただ樹木は高くなっている、だが、驚くにはあたらなない、ともかくも十六年のあいだ成長していたのものの、それでも、ほんやりとした記憶のなかにあるのが緑の葉叢はぢらだということ、今は冬のために裸の枝々が並木の寸法を小さく見せているのとで、現在の姿がそれほど大きくは感じられない。

雨は小降りになり、雨粒がバラバラと落ちていただけである、だが、ひと筋の青空もなく、空はびつたりと閉ざされ、一面鉛色の広大な天井だ。雨はずいぶんと降ってるのかい、乗客が訊く、洪水ですとんど走っていない、電車は減多に來ない、疑わしうに傘をたたむ歩行者がひとりふたり、歩道沿いに排水溝がつまってできた大きな水たまり、数軒の暗いバーが軒を並べて開いている、そのねばっこい電灯は影にかこまれ、トタン板のカウンターの上によごれたワイングラスの寡黙な形。これらの家々の正面が町を隠す城壁を成していて、タクシーはそれらの家々に沿ってゆつくり進む、まるで裂け目を、くぐり戸を、裏切りの門を、迷路への入り口を探し歩くかのように。カスカイス行きの汽車がゆつくりと通り過ぎ、氣怠そうにブレーキをかける、タクシーを追い越すだけのスピードで來たものの、タクシーよりもおくらで駅に入る、その時にはタクシーはすでに広場をまわり、運転手は言う、ホテルは通りの入り口にあるあれです。彼は喫茶店の前に車を停め、つけ加える、いちばんいいのは部屋があるかどうかをまず見に行くことでしよう、市電が通るんで門口で待つわけにはいかないんですよ。乗客はタクシーを降り、喫茶店をちらつと見る、屋号は**ロゼ** 共和制時代における王制をなつかしむ商業上の例なのか、それとも、ここでは英語かフランス語でおい隠した前時代の残存物なのか、これは興味深い問題だ、人は眺めるがその単語をどう読むのかわからない、ロイアルなのかルワイアルなのか、彼にはその件をあれこれ考えるだけの間があった、もう雨は降っていないし通りは上りになっているからだ、それから、部屋のあるなしはともかくとしてホテルから戻る自分を想像する、タクシーは影も形もない、荷物、衣類、日用品、書類といっしょに消えている、そして、それらの品物やその他すべてのものを奪われたらどうやって暮らそうか、と自分自身に問いかける。これらの想念から自分がひどく疲れていることを悟ったのは、すでにホテルの外階段を上りつめてるときだ、

彼が感じているのは激しい疲労、魂の倦怠、絶望、この単語を発し理解するだけ十分に絶望とはどういふものかを我々が知っていればのはなしであるが。

ホテルのドアを押し開けると、電気ブザーが鳴った、昔だったら小さな鐘があつて、ちりんちりんと鳴るところだが、人はつねに進歩と改良を当てにしなければならぬ。急な階段があり、そのいちばん下の手すりの先端部に、右腕でガラスの球をもちあげている鑄鉄製の人形がのつかつている、人形は宮廷服をまとった小姓を象つて^{こしやう}いる、この表現がくり返しによつて何か得るものがあるとすれば、この表現が冗語法でなければ、というのも、宮廷服をまとつていないような小姓など存在しないからであり、小姓というものはそのためのものだからだ、こう言つた方がはつきりするだろう、服のカットからするとイタリヤ・ルネッサンス風の小姓の服装をした小姓、と。旅人は果てしない段々をよじ登る、二階にたどり着くのにこんなに上らなければならぬのは信じがたいように思われる、これはエベレスト登頂、今なお登山家の夢でありユートピアである壮挙だ、彼をほつとさせたのは口髭の男が上に現れたことである、ほら頑張つてという勇気づけの言葉とともに、実際にはそのようなことを言つてはいない、だが、いかなるよい風と悪い天候がこの客を連れてきたかを調べるために、高い踊り場から身をのり出して眺める彼のやり方はそのように解釈することができる、いらつしやいませ、こんにちは、息が苦しくてそれ以上は言えない、口髭の男はやさしく微笑^{わら}う、お部屋ですか、そして微笑は今や謝つてゐるような微笑になる、この階には部屋はないのです、ここはフロントと食堂とラウンジ、そして奥の方に調理場と食器収蔵室があるだけでして、部屋は上なのです、したがひまして三階に上らなければならぬのです、こちらのこの部屋はせまくて暗いので使えません、これも駄目なのです、窓が裏に向いておりますので、こちら皆ふさがっております、川の見える部屋が欲しいのだが、はあ、さようでございますか、それでは二〇一号室がお氣に召しますでしょう、今朝空きま

した、すぐにご覧に入れます。部屋は廊下のいちばん奥にある、ドアにはエナメルのプレートがついている、白地に黒い数字、もしこれが質素なつましいホテルの部屋でないとしたら、部屋番号が二〇二号であるとしたら、宿泊客はジャシント^{ジャシント}といい、トルメスの農園の主であるかもしれず、この話はアレクリン通りではなくてシャンゼリゼの話ということになるだろう、坂を上った右手ということではブラガンサ・ホテルと同じで、その点については両方の話は似ている。旅人はその部屋が、より厳密に言うならば、それらの部屋が気に入った、というのも、それは、弓形の広い開口部でつながったふたつの部屋から成っているからだ、あちらには、昔だったらアルコールと呼ばれたであろう寝室、こちら側には居間があり、全体として、磨き上げられたマホガニーの黒っぽい家具、窓にカーテン、ランプシェードのあるアパートの部屋のようなつくりになっている。旅人には、通りを上る電車の耳障りなゴトゴトという音が聞こえる、運転手の言った通りだ。その時、彼には、タクシーを降りてからずいぶん時間が経ったように思われる、タクシーはあそこはまだいるだろうか、そして、持ち物を奪われるかもしれないという自分の不安を心のなかで笑う、部屋はお氣に召しましたか、支配人が訊ねる、支配人らしい声に威厳がこもっているが、部屋貸しビジネスにあさわしく穏やかだ、ええ、結構です、ここにします、それで、お泊まりは何日でございますか、まだわからないんだ、解決しなければならぬいくつかの問題と、それにかかる時間によるんでね。よくある対話、このような場合のつねに変わらぬ会話だ、だが、今のこの場合、偽りの要素がひとつある、旅人にはリスボンで片づけるべき問題などない、そのように呼ぶに値するものは何ひとつない、嘘をついたのである、不正確さを嫌悪するとかつて明言したことのある彼が。

ふたりは二階に降りる、支配人はメッセンジャー・ボーイでありポーターである従業員を呼ぶ、この方の荷物を取りに行くんだ、タクシーは喫茶店の前に停まっている、そして旅人は、走行料金——